米どころ空知を貫く もう一つの「川」

北海幹線用水路は、空知平野の水田を潤す長大なもので、空知中央部の赤平市から、砂川市、奈井江町、美唄市、三笠市、岩見沢市、北村、栗沢町、南幌町と北から南へ約80㎞に及ぶ。これは日本でもっとも長い農業用水路で、受益面積は約2万6000haに達する。

用水路のルートは赤平の空知川頭首工（水の取り入れ口）から夕張山地の西側の丘陵下部に沿って南下するので、途中いくつかの小河川をまたいだりしなければならない。こうした箇所では水路橋が設けられている。ペンケウタシナイ川の上を通るペンケウタシナイ水路橋などはその代表的な例であるが、そのほかにも奈江川、奈井江川、産化美唄川、茶志内川、栗沢の加茂川などに水路橋が設けられている。また、美唄川、幾春別川、幌向川、新夕張川など、逆サイフォンを設けて川の下を抜ける工法が採られたところもある。

丘陵末端とはいえ、山腹には起伏が少なくないからトンネルで通過する箇所もある。かつて空知地方には多くの炭鉱があって石炭積み出しの鉄道が東西方向に通っていたので、それらの鉄道路線の上下を抜ける必要があった。

灌漑用水路は農家にとって営農に不可欠なものだが、一般市民はほとんどその存在も意義も知らない。それどころか時には邪魔な存在だと思われている場合すらある。ことにこの用水路は市街地、

短期間で完成した「難工事」

用水の受益面積約2万6000haというのは北海道の水田面積比（1997年）としては約10・8％になる。北海道の水田の約75％は空知、上川、石狩地方にあるから、この中での割合はもっと大きい。

用水路計画は1909（明治42）年に立てられたが、第一次世界大戦の戦後不況などで実現に至らなかった。1915（大正4）年に再び計画が浮上、1921（大正10）年調査が行われ、1923（大正12）年11月に着工の予定であったが、関東大震災のあおりでまたまた延期、ようやく1924（大正13）年着工、4年4ヵ月という短期間で1929（昭和4）年に完成した。

赤平頭首工から6工区に分けられ、1925（大正14）年から着工、その後、各所で揚水機場、分水工、放水工などが整備された。箇所によっては着工後も地主の了解が得られず、土地買収が進まないで難航したというが、最後には解決して予定通り工事は完了した。また、工事中に洪水や出水が起きたところもあった。

支線（支幹線、支派線）水路としては豊沼、茶志内、晩生内および沼貝幹線などがある。これらは北海幹線用水路と平行して着工され、1929（昭和4）年に竣工した。函館本線、室蘭本線の鉄道を横断する工事は当時の鉄道省に委託されて